
《妹総受け》暇潰し《お酒ネタ》

天狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《妹総受け》暇潰し《お酒ネタ》

【Nコード】

N86070

【作者名】

天狼

【あらすじ】

ポッキーの日記念小説！

お酒ネタです…

妹子と鬼男くんはお酒弱いといいな！

（前書き）

ポッキーの日記念小説なのにポッキーあんまり関係ないです…

「今日は何の日でしょう。」

そう言った曾良くんが僕の方をじっと見てくる。

え…何それ。僕に聞いてんの？

今ここ法隆ぢ2には、カレー臭い太子と僕小野妹子、太子の友達の変態閻魔さんとその秘書で今居るメンバーで一番信用できる鬼男、みんなの保護者役の芭蕉さんとその鬼弟子の曾良くんが集まっていた。

僕ら6人は暇な時には集まってみんなで飲み明かしたり、カラオケに行ったりするのだ。

今日は法隆ぢ2で飲むことになっている。

「今日…なんかあったっけ？」

「……。」

曾良くんは僕に冷たい視線を送ってくる。なんだよ、なにもないから、今日は集まって飲むんじゃないの？

「曾良くんの誕生日とか？」

「僕の誕生日はとくに過ぎてますけど？」

曾良くんの視線が更に冷たい物になった。

「僕の誕生日覚えてないんですね。」

曾良くんが目…怖い。

「ごめんなさい。」

曾良くんは大きく溜め息をついた。

「別にいいですけど？恋人じゃあるまいし。」

そう言うと言を睨みつけた。

顔が別にいいって顔じゃないよ。

「妹子さん…本当に解らないんですか？」

「……解りません。」

「全く…。呆れました。こんな事誰だって知ってますよ。」

「そうなの？」

「試してみましようか。…皆さん、今日は何の日ですか。」

「「「ポッキーの日。「「「」

さっきまで、思い思いにお酒を飲んでいた4人が突然統率されたように言った。

「…と言うわけで妹子さん、ポッキーゲームしましょう。」

いやいやいや。意味わかんないし！

男同士でポッキーゲームやっても面白くないって！

「おーっ、いいねえ！俺も入れてよ！」

「私も！」

「曾良くんは本当に面白いことを思いつくね…」

上司組が次々と参加を決めてしまったため、味方が鬼男だけになってしまった。

「鬼男…」

「ぼくもやります！」

何でだよ！

鬼男は僕の見方じゃないの！？

そこで僕は気づいた。

…鬼男の前に大量に転がっているお酒の瓶、缶に。

鬼男は自分がお酒に弱いのが知ってるはずなのに、こんなに飲むなんて、らしくない。

まさか…

そう思い閻魔さんの方を見ると、バチツ　とウインクされた。

やっぱり、あなたですか。

閻魔さんは凄くお酒に強くて、酔ってるところなんて見たこと無い。同じくらい強いのが芭蕉さん。

太子と曾良くんは普通よりやや強いぐらいで、僕は全く飲めない。

「鬼男くんが酔ってるところ見たかったんだもん」

……そうですか。

可哀想な鬼男。きつと無理矢理飲まされたんだろうな…。

「じゃあ、ポツキーゲームはじめますよ。」

そう言うと、曾良くんはポツキーの片端をくわえて、僕の方へポツキーを突き出してきた。

「妹子さんはそっちをくわえてください。」

「「ちよつと待ったあ！」」

閻魔さんと太子が全力で待ったをかけた。

「邪魔する気ですか？」

「するに決まってるでおま！」

「そうだよ！妹ちゃんは、セーラーを着て俺とプレイするんだよ！」

なんか、やること増えてる！

セーラーなんて聞いてないよ！

「ちよ、閻魔、プレイって…まさか…」

「え？…ああ。ポツキーゲームやるってことは、妹ちゃんとキスするんでしょ？キスだけじゃ絶対物足りなくなるだろうから、そのまま持って帰る。」

僕は大きいため息をついた。

「閻魔さん。」

「なあに？妹ちゃん。」

「あんまりふざけたこと、ほざかないでくださいね。」

「そうだぞ閻魔！妹子を持ち帰るのは私だ！」

なんか、もう疲れてきた…。

「妹子さん。」

「はい？」

「あんなバカ達なんかほっておいて、早くやりましょうよ。」

そう言つて曽良くんはポツキーを差し出してくる。

「待ったあ！」

「チツ……今度は何ですか。」

待ったをかけたのは、酔っぱらっている鬼男だった。

「いもこのちゅーは、ぼくのだあ！」

鬼男は高らかにそう宣言すると、おもむろに唇を重ねてきた。

「っ！」

「「「あー！」「」」

曽良くんによつて鬼男は僕から引きはがされた。

「この酔っ払いが…見境もなくっ…！」

「うるせー。ぼくだっておとこだー！」

「鬼男くんが…あのキングオブシャイボーイの鬼男くんが…」

「酒の力つてすごー…」

閻魔さんと太子は手を取り合って、驚いている。
気持ち悪いなあ。

つというか。そんなことより。

鬼男にちゅーされた……

「?…妹子さん顔赤い。」

「えっ!」

曾良くんにそう指摘されたから、自分の頬に触れてみた。

熱い…

意識してしまうと僕の頬は更に熱くなった。

「意識してるんですか。…許せませんね。」

曾良くんは僕の頭を抑えて、口にポッキーを押し込むと、自分もポッキーの端をくわえた。

そして僕の頭を抑えたまま、ポッキーを食べていく。
どんどん曾良くんの整った顔が近づいてきて…

ちゅっ…

うわ!またちゅー…

しかし、曾良くんはこれでは終わらなかった。

くちゅっ…

なんと、舌を入れてきたのだ！

「「あーっ！」」

「ごちそうさまでした。」

僕は、曾良くんを突き飛ばした。

「ちょ！曾良くん！なにやってくれてんの！！」

「妹子さん…鬼男のキスは意識するのに僕のキスは怒るんですか。」

……「気に入りませんねえ。」

「気に入らないと言っな！キスできただけでも良かったと思え！」

太子が曾良くんに怒鳴った。

「てゆうかさあ、妹ちゃん？」

「…はい。」

唐突に閻魔さんが落ち着いた声音で話しかけてきた。

「冗談抜きで言っけどさ、鬼男くんと曾良とはちゆうしたのに、俺とか太子とか芭蕉さんは何にもなしなんて言わないよね？」

この人は真顔で何言ってんだ。

「ってなわけで、妹ちゃん。まず君は、お酒を飲みましょー！」

「はあ！？何でそうなるんですか！」

「いいからいいから…」

「ちよっ、よくな…んぐっ！」

「さてと。妹ちゃんが程よくお酒に飲まれたところで、ポツキーゲーム開始ー！」

「「いえーい！」」

僕と鬼男は、閻魔さんのポツキーゲーム開始宣言に大きな声で返事した。

こういうときは盛り上げなきゃね！

「さあ、妹ちゃん。誰とポツキーゲームしたい？」

「えー。ぼくがきめるんですかあ？まよっちゃうなあ…！」

太子と曾良くと芭蕉さんが心配そうに僕を見ていた。

「妹子さん…ちょっと酔いすぎじゃないですか？」

「私も薄々そう思ってた…」

「閻魔くん、際限なく妹子くんに飲ませてたもんね…」

閻魔さんが僕をぎゅっと抱きしめて耳元で囁いてきた。

「でも妹ちゃんが決めてくれないと、俺、困っちゃうー」

「こまっちゃうんですかあ…えー…」

鬼男はポツキーで僕のほっぺをつついてきた。

「いーもこおーしょうじきに、いうんだぞおー」

「うー…じゃあ、ぼく、みんなとやりたい！」

「わーお！妹ちゃん、大胆！」

僕はここにいてみんなのことが好きだし、誰かを特別扱いすることはできない。

……わからないふりをしていても、みんなの気持ちはちゃんとわかっているつもりだから。

あわよくば、僕らの関係がずっとこのままでありますように。

（後書き）

こんなのでごめんなさい！
日々精進します！

妹子って（パンツ
いいよね（パンツ
↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8607o/>

《妹総受け》暇潰し《お酒ネタ》

2010年11月21日18時24分発行